

変革の時代を生き抜く英知を育てよう



上野 順一郎

相撲界にモンゴル旋風

相撲という競技は、わが国独自のもの（国技）であるためか、TVを見ていても力士の出身県や市町村に至るまで、詳しく教えてくれる。それがある意味で日本的であり、また魅力となっている。TVでの相撲放映を見ていて初めて知っただが、力士の出身地が時代によって変化しているという。かつて「相撲王国」と言えば北海道だったが、現在は関取と呼ばれる力士はゼロだといひ、それでは最も力士の多い都道府県は何処かと言うと、意外にも東京都である。かつて北海道は寒冷地で産業も少なく経済的に貧困な地域だったことで、下積みから忍耐と努力で地位を登りつめねばならない相撲に適していると思われ、反面、何事にも便利な都会の子供達には相撲に耐えるだけの根性すらないのだろうと思われていた。しかし、現実には逆転していた。力士になるという行動のメリットや価値観みたいなものが子供達にイメージとして別の意味に捉えられているようである。

相撲界のもうひとつの現象として注目

されるのが、モンゴル出身の力士。今は相撲の世界に16名もいる。しかも、今、夏場所は「モンゴル旋風」と言われたように全てのモンゴル出身力士が好調だった。確かにモンゴルには相撲に似た格闘技があり、肌や髪の色、体形も日本人に似ている。だが、それが理由でモンゴル力士が増えたとは思えない。

まず、考えられることは先鞭をつけたモンゴル出身の旭鷲山が活躍し、相撲の世界で十分に通用することが分かった事が一つあるだろう。だが、それだけではないはずだ。遊牧の民であったモンゴル人は、近代化・工業化に乗り遅れ、経済的に豊まれた民族ではない。しかも、昨冬は極度の寒波が襲い、多くの家畜が凍



死したと報じられた。案外、そんな事が理由かも知れないと思ったりもする。

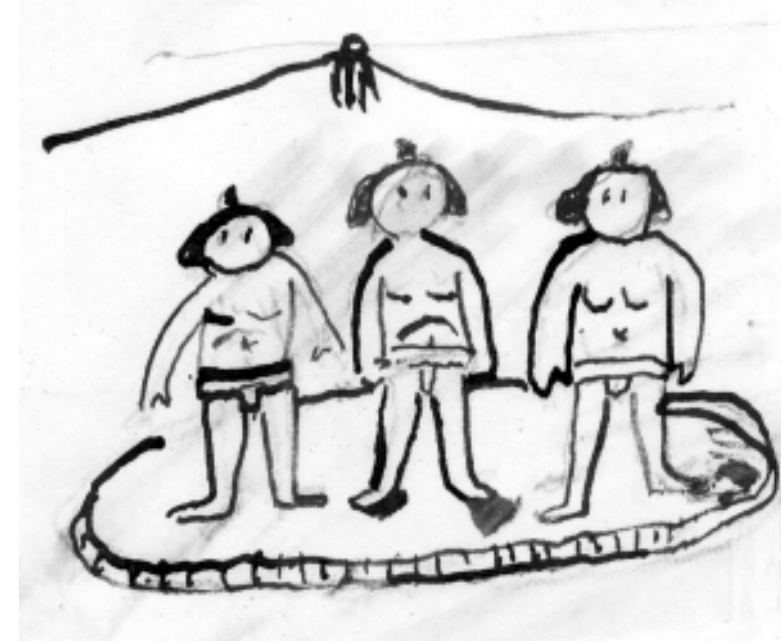
そこで、手元にあった司馬遼太郎さんの『草原の記』を開いてみた。確かに世界帝国をつくり、ほぼ世界を征服したモンゴルの民が、歴史と時代の波の中で浮沈を繰り返し、現在に至るまでを見直してみれば、何かヒントが潜んでいるかも知れない、と考えたからだ。

寡欲な遊牧民たち

そう思って『草原の記』に目を通してみた。我々は中学の歴史教科書で、モンゴル人のことを匈奴・キョウド・フンヌと習った。フンとはモンゴル語で“人”という意味だそう。この匈奴帝国が東洋史に現れるのは、紀元前4世紀末とされている。その頃、匈奴帝国はすでに青銅器を所有していたという。この青銅器文明も「中国から借用したものではあるまい」と司馬さんが述べている。では彼等が独自に発明したものかという、そう

でもないらしい。紀元前1500～1200年頃、青銅冶金が普及し、牧畜だけでなく文明の基盤といわれる農業もおこなわれていたらしい。つまり、イェニセイ川（盆地）に文明の拠点があり、古代シベリアにおける一大冶金工業地帯があったというのだ。司馬さんは、この盆地の金属文明こそが、モンゴル高原における匈奴を成立させたと思っている - と書いている。この盆地の遺跡は匈奴の最盛期と一致し、紀元前7～3世紀のものらしいというのだ。

スキタイという古民族は世界史の中で輝いており、紀元前7～3世紀にかけ、黒海北岸の草原（ステップ）で活躍して、遊牧文明を発明した騎馬民族らしい。しかも、人種は白色種（コーカソイド）だった。匈奴がスキタイの影響を受けたのは言うまでもなく、しかも、スキタイ文明の源流はシベリアにあったという。以上をみても匈奴がどんな人種だったのか、遊牧の元祖ともいえるスキタイ同様、白人だったか黄色人（モンゴロイド）だったのかは未だにハッキリしないようだ。



匈奴と敵対したのは黄河文明国（漢民族）で、農耕を中心とした彼等に対する北方からの侵略者である匈奴から身を守るため、後に万里の長城といった途方もない城壁を作ったりしている。この遊牧民と農耕民族の対立というのは、後世から眺めると興味深い。長城は遊牧国家と農業国家の「せめぎあいの象徴」だからだ。

農耕の漢民族は、自分等以外の人種（民族）を夷狄（いてき）という蔑む呼び名を付けるヘキがあるが、遊牧民は元来、物を貯える必要がないので街もいらなければ城もいない。家畜を追って草を求め続けられればよい。だから土着の思想もないのだ。黄河農耕文明国にとっては、土を耕すことは天の嬉ぶことだろうが、遊牧民族はそれを悪とした。

農耕文明には、物を貯えるという特徴がある。食物、布、金属、什器、更にいえば過去から見た現在の収穫や分配のた

めの記録、あるいは農耕の暇な時に読む書籍。田園を統べる政庁の城内の官廩に租税としての穀物を積み上げ、また、商人は布などの商品を貯える必要があった。遊牧民は古来、物を貯える習慣がないのでクラなどは必要ない。だから、たいていのモンゴル人は物を欲しが^{くら}る心が削ぎ落とされていて、むしろ、日常かると移動のあることを愛していた。つまり、移動こそ生涯であると思ひ、同時に戦闘であり人生そのものと思っていたのだろう。これほど相反する民族が、隣り合わせに住んでいたということは、お互いを人間とは思わなかったろうし、対立の歴史は見果てぬ夢のように永いものとなったことであろう。

そのことが明らかになるのは、13世紀に入りチンギス・ハーンによるモンゴル帝国であった。そんなチンギス・ハーン、2世のオゴタイ・ハーンなどは世界最大の帝国を作り上げる。NHKの大河

ドラマ「北条時宗」はフビライの時代の話で、時代認識も出来るだろう。

だが、^{かよく}寡欲はどの民族にとっても美德であるといわれる。しかし、世界史の近代化は物欲の肯定から出発したため、やがてモンゴル近代史にとって、この美質は負い目になってしまった。元王朝(1260~1368年)は寿命の短い王朝になってしまった。それは、漢民族の国家を征服(漢国土に土着)するうちに感化され、寡欲の美風をなくし、物欲を持ち合わせるようになった結果も影響したことだろう。人間、華美・遊惰が身に染むのは早い。占領地漢民族国家に永く住んだモンゴル人達は、元来肉食で騎馬で移動するため、筋肉質だったがすっかり肥満になってしまい財産も貯めていたそう。だが、宗教などには実におおらかで、イスラム教、キリスト教、仏教からゾロアスター教まで、何でも認め

ていた。人種だってあまり気にしなかったのではないだろうか。オゴタイ・ハーンは「永遠なる物とは何か、それは人間の記憶である」と言ったそうだが、巨大な都市や城も築かず文化遺産を残さなかった彼等にとって最も誇るべきものは過去の記録だというのは当然のことのように思える。そう考えると若きモンゴルの青年達が日本という国の国技である相撲の世界に飛び込んでくるのはひとつの記憶を作るためであるかも知れない。ただ、皮肉なことに、相撲とは米作の豊作を願う儀式から発していることだ。現在のモンゴルの国土はフランスの約3倍、人口はわずか235万人、しかも他民族に比べて卓越した肉体と知力を持つ誇り高い民族だ。当然の事ながら格闘技などの伝統は根強く残っていたに違いない。その誇るべき伝統技で海外に進出し、その力を発揮することは民族の持つ優越感

を満足させるに充分であるだろう。

子宝の言葉が消えて行く

“永遠なる物、それが人間の記憶だ”という言葉は、モンゴルの民にして始めて言える言葉のようだ。近代は言葉を無力なものにする傾向がある。機械文明、物質文明などは人間の記憶までも空虚なものにしてしまった。人間の当然の行為までもが意味を無くし、犯罪と見なされる行動をとる者までいる。

万葉の歌人山上憶良は、いかなる宝物より子供に勝る宝はないと詠んだ。なのに何故なんだ、児童虐待が年に3万人というのは、何が若い両親達をそうさせるのか。

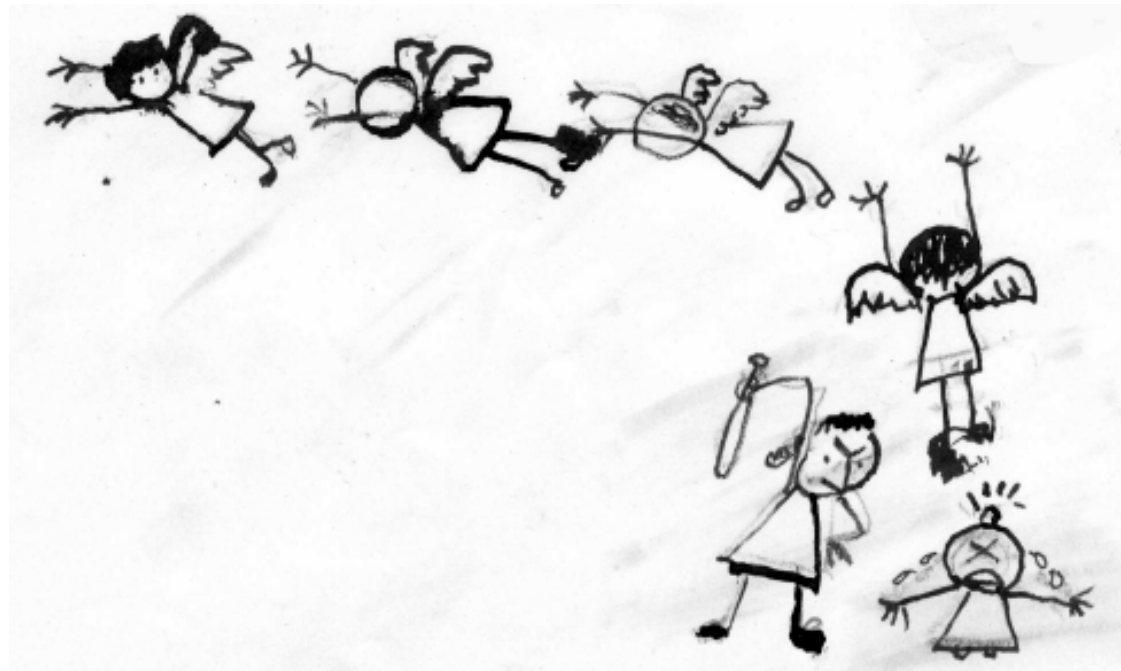
自分たちが産んだ子供を虐待する事だけでも信じられない事なのに、殺してしまう者すらいるという。何時頃からそんな風潮が世の中に広がり始めたのだろう。大きな価値観の変化でも起こっているのだろうか。

児童虐待防止法が昨年11月に施行された。事実、児童虐待は防止法を必要とするほど増えつづけている。今年1~3月に全国の警察が摘発した件数は51件。昨年同期より約31%(12件)増えている。統計を取り始めた1999年には25件だったのに比べると、2年間に倍増したことになる。このうち16人の子供が死亡している。

児童虐待事件の容疑者として逮捕、送検されたのは57人。「実母」が23人で最も多く、次いで「内縁の夫」11人、「養父・継父」10人、「実父」9人。罪種別では傷害致死6件など。

山上憶良ならずとも子宝という言葉があるように、将来の可能性という点では、両親などは子供に将来を託すということが自然だ。

その将来を担う幼児が、ムズガル、親に馴れないといった理由で折檻し、殺してしまう。信じ難い行動だし、母親の関わる場合が多いというのも納得しがたい。これはどうも親達の^{わがまま}我儘というか、我慢性のなさなのだろうが、親たちが育



つ間の躰^{しつけ}や教育に欠陥があったのだろう。物質的に恵まれ、欲しい物は与えられた高度経済成長期が、彼等から耐える事を奪ってしまったようだ。

人々が賤しかった江戸や明治、大正、昭和の戦前までは、賤しさに耐え親兄弟がお互いに助け合うのは当たり前だった。しかし、賤しさからの開放は、何人にとっても喜ばしいことだが、肉親間の思いやりや助け合いの優しさといったものを奪い捨てて去ってしまった。

それと、世の中は情報通信革命・IT革命と呼ばれるコンピュータや通信技術に支えられる革命が起こり、世の中の在り方そのものを変化させようとしている。その改革の波は、好む好まざるとにかかわらず、滔滔^{とうとう}と流れに巻き込んで流れ去る。

確かにビジネスにとって、意志決定や情報伝達というのは、早いほど有利になる場合が多いだろう。ただ、そのスピードに馴れなかつたり技術的に未熟だった

ために、チャンスを逸した経験を持つ人は多い。それが個人のレベルにまで及んでくると、その人の人生に及ぼす影響は大きい。高度経済成長が人の親となる若者に、予想以上の悪影響を与えたように、情報通信革命が社会に及ぼす影響はどう見ても少なくない。人にはそれぞれ自分に合ったりリズムがあるが、急テンポの社会に放り出され、自分を取り戻す時間もなく、人生に取り残される人だっているはずだ。人生はビジネスとは質的に異なるもので、機械に合わせねば生き残れない人間なんて、全く味気ない。だが、世の中の科学の進歩は、そんな人間を汚物のように捨て去り、振り向きもしない。科学は人間個々の適性や不適性などを考慮する事もなく、進歩というばら色の道を突っ走って行く。科学がもたらした地球環境の悪化のように、情報通信革命も人間にとって将来、大きな負の遺産を残すかもしれない。心して周囲の変化や現象を眺める必要があるようだ。